

資料 デジタル図書を活用しないで学習した「ゼブラ」の比較検証について

(1) 活動概要

中学部第2学年の国語科単元「読んで問う」（光村図書）において、「ゼブラ」を題材とし、初読の感想の共有、問いを立て考察、発表し共有するという活動を行った。星新一のショートショート of the 学習においてデジタル図書を活用し、デジタル図書を活用しないで学習した「ゼブラ」と比較することで、読みを共有する際に、各生徒の視点の広がりに変化がみられたかどうかを検証する。

(2) 有効性の検証

右は生徒が一人で読み進めた「ゼブラ」の発表の際に行われたやり取りである。

発表した生徒Aは、共有というキーワードで解釈している。生徒Bは、共有の理由を後悔や責任という視点を加えて説明しようとしている。生徒Aはその解釈もできると理解を示しているものの、後悔や責任と共有がこの時点でつながっていないまま発表が終わり、お互いの意見に反映させるまでに至らなかった。つまり、以上の活動では、意見を咀嚼し、自分の読みとの往還を行い、視野を広げるまでには至っていないことがわかる。

デジタル図書を活用しなかった事例「ゼブラ」

（斜体は執筆者によるもの）

- ・私が立てた問いは、ウィルスンさんはどうしてレオンさんのために毎年、私のために作ってくれた素晴らしい贈り物を探しに行くのだらうということです。（中略）贈り物をもらった時の嬉しい気持ちを共有したかったのかなと思いました。（生徒A）
- ・誰かが私のために作ってくれたというのは、本当ならレオンのために作ってくれた人がいたはずという後悔や責任を感じているのではないかと思います。（生徒B）
- ・私もそれは思っていたこともあったけど、ウィルスン先生はレオンさんの影響を受けたという描写があるので、その解釈もできるかなと思いました。（生徒A）

(3) 考察

新型コロナウイルスの影響で、在宅によるオンライン学習状況下では、話し合い活動につなげることが難しく、写真や画面共有では生徒の意見を一度に見ることができなかった。その結果、一人で読み進めることに終始してしまった。また、生徒が一人で読み進めることから、その生徒の興味関心に沿った問いと答えに限定され、発表の場を設けても発表を聞いて理解はできるものの自分の意見に反映させるまでに至らなかった。